

主 題：「新しい人、新しい歩み」

聖書箇所：コリント人への手紙 第二 5章17節

最近はいろいろな信仰を持つ方々と出会う機会があります。先日もある人が会話を始めてすぐに「私はイスラムです」と言われ、私は「私はクリスチャンです」と答えました。私たちはこの町にいてイスラムの人と出会う機会はほとんどないでしょう。どのようなことを信じておられるのか？どのような人々なのか、知ってみたいと思いました。その時に思ったことは、たとえば、だれかが信仰者であるあなたに「クリスチャンっていったい何ですか？クリスチャンをひとりで説明してください。」と、もし、そのように言われたとしたら皆さんはどうお答えになりますか？いろいろな答えがあると思います。このように言う方がおられるでしょう。「主イエスを信じている人のことです。」と。また、次の答えは余り褒められないのですが、ある人は「クリスチャンとはキリスト教を信じている人のことです。」と言うかもしれません。この答えをする人がこの群れの中にいないことを期待しますが、「クリスチャンとはこのような人だ」と人々はいろいろな説明をするでしょう。

★「クリスチャン」とは？

今日、私たちがいっしょに学びたいことは、私たちクリスチャン、信仰者、イエス・キリストによって救われた者たちが「私はこういう者です。クリスチャンとはこういう人です。」ということのをだれにでも説明できることです。そのためには私たちはそのことを知らなければいけません。そこで私たちはパウロが教えるその定義について、彼の与える説明を今から見ていきたいと思えます。彼は言うのです。「クリスチャンとはこういう人です。イエス・キリスト信じている者たち、信仰者とはこういう人です。」と。テキストはコリント人への手紙第二5章17節です。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」、この「新しく造られた」とは「新生」のことです。新しく生まれ変わることです。この「造られた」という名詞は被造物などに使われることばですが、それだけではないのです。新しく生まれ変わった人のこと、神によって造り変えられた人々のこと、もっと言えば、救われた人々に対してもこのことばを使うのです。例えば、ガラテヤ6：15を見ると「割礼を受けているか受けていないかは、大事なことはありません。大事なのは新しい創造です。」とあり、同じことばが使われています。神によって新しく造り変えられること、つまり、救われること、それが最も大切だと言うのです。ユダヤ教の教師たちは罪が赦された人のことを説明する時に「新しく造られた」と言いました。パウロはこの5章17節で、私たちに二つのことを教えます。

A. 主との新しい関係を得た人 : 主なる神との関係をもった人

「だれでもキリストのうちにあるなら、」

1. 主イエス・キリストと個人的な関係を持っている人のこと

ここでは主イエスに関する知識を持つことを言っているわけではありません。個人的に主を知ることで、注意していただきたいことは、確かに、私たちは「知っている」ということばを使いますが、使い方によって意味が全く異なることです。例えば、私たちの首相に関して言うなら「私たちは安倍首相のことを知っている」と言います。なぜ、知っているのか？テレビなどのマスコミを通して私たちは彼のことを知るからです。私たちは彼の顔も知っているし、声も聞いています。家族のことも少し知っています。ですから、私たちは「首相のことを知っています」と言うことができます。でも、私たちが「首相を知っている」と言うならそれは別のことです。もし、私たちがそのように言うなら、彼を個人的に知っているということになります。マスコミに見せないその人の様子であったり、マスコミが取り上げないいろいろなことを知っている。なぜなら、個人的に交わりがあるからです。

つまり、私たちが「イエス・キリストのことを知る」というのと「イエスを知っている」というのは全然違うことです。「イエスを知っている」と言う人はたくさんいます。イエス・キリストの名前を聞いたことがあるとか、イエス・キリストが何をしたのかなど、多くの人たちがそのことを知っているからです。ですから、多くの皆さんが「私はイエス・キリストのことを知っている」と言います。しかし、イエス・キリストを知っている人がどれだけいるでしょう？イエス・キリストを知っている人とは、イエス・キリストと個人的に交わっている人たちです。イエス・キリストを個人的に自分の神、自分の救い主と信じて、そして、神との関係が修復されて救いに与った者たちです。ですから、その個人的な交わりに入れられた者たちは、イエス・キリストを見ていなくても、父なる神を見ていなくても、

神がいつも私とともにいてくださるということを確認しています。皆さんそうでしょうか？主がいつも皆さんを励ましてくださるから、その励ましをもって「ああ、神がともにいてくださるのだ」という強い確信を皆さんはお持ちだと思います。どんな時にでもあなたは祈ることができるのです。なぜ、祈るのですか？教会で教えられているからではありません。主があなたの祈りをいつも聞いてくださることを知っているからです。私たち信仰者は全能の神の前にすべてのことを持っていくことができることを知っているからです。そして、主が私たちに励ましてくださる、主が私たちに慰めてくださる、それゆえに、私たちはその主を見ていなくても、主が喜んでくださることを考え、喜んでくださることを選択し、喜んでくださることを行なっていこうとするのです。なぜ、そのように考え、なぜ、そのように生きていこうとするのでしょうか？私たちは主なる神と個人的につながっているからです。

パウロはそのことを言っているのです。「だれでもキリストのうちにあるなら、」と。イエスのことをどれだけ知っているのかではないのです。イエス・キリストご自身を、その個人をあなたが知っているかどうか、その個人とあなた自身が交わりがあるかどうか、その個人と関係があるか、そのことを言っているのです。

2. キリストによって受け入れられた : 神の子とされた

みことばの中には確かにこのように教えられている箇所があります。ヨハネの福音書 1 : 12 「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」、イエスを信じたあなたは神の子どもとされているのです。父がどういう方であり、父がどんなにあなたを愛しておられるのか、父がどれ程罪を憎んでおられるか、そのようなことをすべてあなたはこの主から教えられているのです。そして、その主を愛する者としてあなたは成長します。そのようなことが起こっているのは主とあなたが個人的なつながりをもってしているからです。ただ知識を持っているだけでない、その救い主をあなたは個人的に知っているからです。

パウロはそのことをこの 17 節の初めに記します。ですから、クリスチャンはどのような人なのか？個人的に主イエス・キリストを知っている人です。この主イエス・キリスト、救い主と個人的な関係がある人です。このような関係に入れられたゆえに、確信をもって「新しく生まれた」と言うのです。

B. 主による新しい人生を送る人 : 「その人は新しく造られた者です」

イエスと個人的な関係にある人は、間違いなくそれが事実であるということをお父なる神ご自身が私たちに明らかにしてくれます。私たちがクリスチャンらしく振舞うのではありません。クリスチャンらしく生きていこうとするのです。そういうことをしなければいけないのではなく、そういうことをしたいのです。そのことに関してパウロはこの 17 節で「新しく造られた人」の説明をしています。

1. 「新しく造られた人」の説明

「古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」とあります。救われた人に関する説明をパウロはここに加えるのです。救われた人とは「かつての自分は死んだ」人であり、「新しい自分が生きている人」だと言います。今から説明します。

1) かつての自分は死んだ

そのことをパウロは「古いものは過ぎ去って、」と言っています。この「過ぎ去って、」ということばの一つの意味は「死んだ」ということです。しかも、この動詞の時制を見ると、パウロは過去に起こったその事実を明確にしたのです。確実にそのことが起こったということをお父なる神に明らかにするために、ギリシャ語のある時制を使うのです。ですから、救いに与ったあなたはもうすでに過去のある時点で「それまでの自分は死んだ」という経験をしているということです。かつての私たちは死んだと言います。いったい、私たちの何が死んだというのでしょうか？

(1) 自分のために生きる人生

私たちは自分自身のために生きていました。そのような人生を送っていました。その生き方、その人生が死んだと言うのです。私たち人間は生まれながらに自分の考えや計画に沿って生きています。自分の夢を叶えたいと思って生きています。もっと自分を満足させたい、喜ばせたいと思って生きています。そのためなら何でもしたいと思えます。あのノアの洪水のところを思い出してください。なぜ、洪水によって人々が滅ぼされたのか？みことばは明確にそのことを教えてくれます。創世記 6 : 5 に「【主】は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。」とあります。なぜ、神が洪水をもって人々を滅ぼしたのでしょうか？人々はだれ一人として神の方を向こうとしないからです。だれ一人として創造主なる神を愛してその神に従おうとしないのです。人々が考えていたことは自分のやりたいことをすることです。「心に計ること」、彼らが考えることはいつも悪いことばかりでした。だれが「悪いこと」と言うのですか？聖い神です。なぜなら、人々は神の前に神がお喜び

にならないことを選んでいるからです。神がしてはならないと言われることを選択し、神がしなさいと言われることをしようとしないのです。そうして神に逆らい続けているのです。なぜなら、人間の生きている目的である創造主なる神を喜ばせることなど微塵たりとも考えていないからです。自分を喜ばせること、自分を楽ませることばかり考えます。自分の人生だから！というわけです。

士師記の中で繰り返されているみことばがあります。「そのころ、イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行っていた。」（17：6、21：25）と。神がどう思うかではないのです。自分がどう思うかで生きていたのです。そのような自分中心の、自分の考えに基づいた自分のことしか考えない人生は死んだのです。そういう生き方は終わったのです。そのことをパウロは言っているのです。

かつての私たちは自己中心的だっただけではありません。永遠に価値のないものを誇りとしていました。ヨハネが言うように「すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。」（Iヨハネ2：16）と、いったい、私たちがこれまで誇りとして来たものは何でしょう？自分が築いた富でしょうか？名声でしょうか？そのようなものは永遠に続かないものです。でも、かつての私たちはそれらを追い求めて、少しでも人々から良く見られたい、人々の尊敬を博したいと考えてそのことのために一生懸命生きて来ました。そういう人生は終わった、それは死んだと言うのです。永遠に価値のないそのようなものを追い求めて生きる虚しい人生はもう終わったと言うのです。

また、私たちはいろいろなことで人に対して偏見を持っていました。人種、社会的地位、その人の持っている富や財産、肩書き、家系、職業など、それらを見て自分勝手な物差しで人々を評価したり、この世的な価値によってその人たちを差別したり、えこひいきしたりします。この人と友だちになったら自分にとってプラスになるからとか、そうでないからこの人とは疎遠でいようとか、そのような虚しい生き方はもう死んだと言うのです。神は私たちを差別されません。えこひいきもされません。ヤコブ2：1にはこのように記されています。「私の兄弟たち。あなたがたは私たちの栄光の主イエス・キリストを信じる信仰を持っているのですから、人をえこひいきしてはいけません。」と、また、同じ2：9にも「しかし、もし人をえこひいきするなら、あなたがたは罪を犯しており、律法によって違反者として責められます。」とあります。ローマ2：11には「神にはえこひいきなどはないからです。」、エペソ6：9には「主人たちよ。あなたがたも、奴隷に対して同じようにふるまいなさい。おどすことはやめなさい。あなたがたは、彼らとあなたがたの主が天におられ、主は人を差別されることがないことを知っているのですから。」とあります。だから、クリスチャンはこれまで生きて来た神の前に価値のない人生、永遠に価値のない人生に完全に別れを告げたのです。そのようなものはもう死んだのです。

（2）キリストへの不従順

私たちが自分のために生きて来た人生が死んだだけではありません。この5：17を見ると、キリストに対して不従順であった私たちのその間違った生き方も死んだと言います。この前の箇所、5：16には「ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知らうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。」とあります。今見て来たように、私たちは自分勝手に自分の目でもって人々を見て来ました。偏見を持って見て来ましたが、それだけでないのです。私たちは神に対しても同じように誤った目で神を見て来たというのです。パウロ自身がそうでした。彼もイエス・キリストについて聞き、イエス・キリストのことについて知っていました。その彼の結論は「イエスは新しい宗教の指導者であって、自分たちの神聖なる信仰を脅かす敵である。」でした。だから、このイエスを信じる者たちを迫害しなければいけないとパウロは思ったのです。

その当時、もし、私たちがパウロに「イエスをだれだと思えますか？」と聞くことができたとしたなら、パウロは間違いなく「神の敵だ」と言ったでしょう。彼はイエスのことが人間的にしか分からなかったのです。でも、今私はそのようにはイエスを見ていない、イエスは真の神であると言います。使徒の働き17：3でこのように言っています。「そして、キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならないことを説明し、また論証して、「私があなたがたに伝えているこのイエスこそ、キリストなのです」と言った。」。かつては、イエスを見た時に「イエスは神の敵だ」と言っていました。しかし、今パウロはこの方こそが約束されていた救世主、キリストであるとはっきりと人々の前で宣言しました。パウロが言うように、人間的な標準でキリストを知っていると思っていたけれど、自分が知っていると思っていたキリストは本物のキリストではなかったと。ですから、パウロが「古いものは過ぎ去った。古いものは死んだ。」と言うのは、このように自分中心に生きていた自分の人生、永遠に価値のないもののために生きていたそのような虚しい人生、キリストのことを正しく分かっていた間違った人

生、そのようなすべてのものは死んだということです。

2) 新しい自分が生きている : 「すべてが新しくなった」

そして、パウロはこう言います。「見よ、すべてのものは新しくなりました。」と。「見よ、」と語っています。「注意を払いなさい」、すべてが新しくなったということに「注意を払いなさい」ということです。17節の「過ぎ去って」ということばと「新しくなりました」という二つのことばを皆さんに見ていただきたいのです。二つとも動詞ですが、パウロは時制を使い分けています。なぜ、パウロは最初に「古いものは過ぎ去って」ということを過去に起こったこととして言ったのでしょうか？もう死んで、そのことはもう解決した問題だと、そのように言いたかったのです。ところが「新しくなりました」ということは、確かに、過去に新しくなったけれど、その結果が現在も継続しているということを言いたいのです。新しくなって終わったのではないのです。古いものはもう死んだのです。終わったのです。でも、新しくされた人はその結果が続いている、今も新しい人として生き続けている、そのことを言わんとするのである。

確かに、パウロはイエス・キリストに出会った時に新しく生まれ変わりました。その劇的な変化は人々を驚かせました。使徒の働き9章にはアナニヤとの出来事が記されています。パウロはイエス・キリストを信じる者たちをより多く捕えて、クリスチャンたちを迫害しようと思いました。ステパノを殺すことに賛成したのはパウロでした。その理由は先ほど説明した通りです。イエス・キリストは神の敵であり、イエスを信じる者たちは我々の正しい信仰に反する者たちだと言って、クリスチャンたちを迫害していたのです。パウロはその当時はサウロと呼ばれていましたが、ダマスコに向かってより多くのクリスチャンを捕えて迫害しました。その途中で、復活のイエス・キリストに出会いました。そして、彼の人生は変わるのです。救われたサウロ、彼はアナニヤの訪問を受けます。9：17-22「そこでアナニヤは出かけて行って、その家に入り、サウロの上に手を置いてこう言った。「兄弟サウロ。あなたの来る途中、あなたに現れた主イエスが、私を遣わされました。あなたが再び見えるようになり、聖霊に満たされるためです。」：18するとただちに、サウロの目からうろこのような物が落ちて、目が見えるようになった。彼は立ち上がって、バプテスマを受け、：19食事をして元気づいた。サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちとともにいた。：20そしてただちに、諸会堂で、イエスは神の子であると宣べ伝え始めた。：21これを聞いた人々はみな、驚いてこう言った。「この人はエルサレムで、この御名を呼ぶ者たちを滅ぼした者ではありませんか。ここへやって来たのも、彼らを縛って、祭司長たちのところへ引いて行くためではないのですか。」：22しかしサウロはますます力を増し、イエスがキリストであることを証明して、ダマスコに住むユダヤ人たちをうらたえさせた。」と、まったく生まれ変わったのです、まさに、これまでのパウロは死んだのです。そして、彼は新しく生まれたのです。神に喜ばれると彼は信じてそのように神の律法に自分なりに精一杯従って来ましたが、それが間違っていることに気付くのです。イエス・キリストは神の敵だと思って来たが、それが間違っていたことに気付かされるのです。そして、その後、新しく生まれ変わったパウロはこのような人へと変わります。

(1) 主を礼拝する者

彼は心から神を礼拝する者へと変わります。ピリピ3：3のみことばでは「神の御霊によって礼拝をし、」とパウロ自身が語っています。形だけの礼拝ではないのです。神の御霊の助けをいただきながら、心から礼拝をささげることです。確かに、神を礼拝していました。しかし、彼は間違っていたのです。イエス・キリストを信じその救いに与ることによって、心から真の神を崇めることが出来るようになったのです。

(2) 主に服従する者

また、彼は主に従う者へと変えられました。これまでは自分の思い通りに生きようと思って、多分、人間的に言えば、自分の夢は叶えることが出来たとそのように彼自身自負することが出来たでしょう。しかし、イエス・キリストに出会った後、それはすべて虚しいものだ、私がこうして救われ、生かされているのは、私を造ってくださった神に従って行くことであると。ですから、主のみこころのために彼は生き続けて行こうとしました。そのようなパウロだからこんなことを言うのです。使徒20：24「けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかす任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」と。私が考えていることはただ一つ、この残されている人生、この地上での人生を神が私に命ぜられたことを忠実に行ない続けて行くそのことだと。そのような人へと確かにパウロ自身変えられています。

(3) 主に対して熱心な者

もう一つ言うなら、彼は主に対して非常に熱心な者になりました。もちろん、それまでの歩みが熱心でなかったわけではありません。でも、事実に基づいていなかった、真理に基づいていない自分勝手なも

の人間的なものだったのです。しかし、主イエス・キリストを信じこの救いに与ったパウロは、真理に基づいて神に対して熱心に生きる者へと変えられたのです。ですから、彼はどこに行ってもイエス・キリストの救いを宣べ伝えようとしました。会うすべての人々にキリストのすばらしい救いを知ってもらいたいと願いました。ペリクス総督のところに大祭司アナニヤや数人の長老たち、そして、テルトロという弁護士たちがやって来て、テルトロがこのように言います。総督にパウロを訴えて言うのです。使徒24：5「この男は、まるでペストのような存在で、世界中のユダヤ人の間に騒ぎを起こしている者であり、ナザレ人という一派の首領でございます。」と、もう何とかこのパウロを消したかった、邪魔で仕方ない。なぜなら、パウロは行く所行く所でイエス・キリストの話をし、人々にこの福音を語り続けるものだから、ユダヤ教徒たちはたまったものでなかったのです。そこで、そのリーダーたちはこぞってパウロを訴えるのです。「早く始末してくれ」と。確かに、パウロは熱心でした。主に対して熱心であり、この主のすばらしい福音を機会があるごとにすべての人に伝えようとしていました。

ですから、もう一度今日のテキストに戻って、5：13を見てください。「もし私たちが気が狂っているとすれば、それはただ神のためであり、もし正気であるとすれば、それはただあなたがたのためです。」とこのような表現を記しています。そのようにパウロを責める人たちがいたからこのように言ったのです。「彼は気が狂っている、尋常でない」と、それ程彼は熱心だったのです。パウロは主を心から礼拝する者として、そして、主に忠実に従う者として、しかも、彼は熱心に従い続けました。パウロは言うのです。「このように新しくされた者、新しい歩みをして行く者、このように生きていく者たち、それがクリスチャンなのだ。」と。

2. 新しい人生

パウロはこの新しい歩みを継続して行くための二つの秘訣を与えています。

1) その動機 5：11

主に対する正しい動機をもって生き続けることです。5：11を見ると「主を恐れることを知っているので、」とあります。「主に対する恐れ」、それがこのパウロが主に対して忠実に、しかも、熱心に従い続けて行ったその歩みの秘訣だと言うのです。彼は主を恐れていたと言います。ここで使われている「恐れ」という名詞形は、確かに、「恐れる、怖がる」という意味もありますが、同時に、このことばには「敬意、尊敬」という意味も含まれます。確かに、この前の10節を見ると「キリストのさばきの座」についてのパウロの説明があります。クリスチャンの皆さんよく聞いておいてください。あなたは「キリストのさばきの座」に立ちます。イエスを信じているすべての者はこの「キリストのさばきの座」に一人ずつ立ちます。例外はありません。ここに立たない人はクリスチャンではないのです、ここに立たない人は別のさばきに立ちます。「大きな白い御座のさばき」です。すべてのクリスチャンは「キリストのさばきの座」に立ち、そこであなたのすべてのことが明らかになります。そして、主があなたに報いを与えてくださる、そのさばきの座があることをパウロは10節で語ったのです。

その後で「恐れる」ということばが11節に出て来るのです。そうすると、ある人はそのさばきの座に立つことを恐ろしく思う、怖がります。それが彼の動機だったのでしょうか？そうではないのです。先程も話したように「怖がる」という意味があるだけではなく「尊敬」という意味があります。実は、このことばをもう少し見て行くと、このことばは「こんなにも愛してくださった神を悲しませたくない」という思いから、どんな悪をも避けて主が喜ばれることを選択して行こう」と、その意味でパウロはここで使っているのです。さばきの座に立つことを恐れて、怖がりながら生きていたのではないのです。彼は主を愛する者です。それは後で出て来ます。主を愛する者であったゆえに、彼が考えていたことは、こんなにまでも私を愛してくださっている主を悲しませたくない、何とかこの神を喜ばせていきたいというその思いが、先程から見ているように、主に従順に従って行こう、主に対してもっと熱心に生きていこうとする行為の動機となっていたのです。しかも、この11節で「主を恐れることを知っているので、人々を説得しようとするのです。」と言っています。神を心から敬って、そして、その方が喜んでくださることを積極的に、自ら進んで選択してそのように生きていこう、そのようにパウロ自身が生きていたし、そして、すべてのコリントの人々に対して「あなたたちにもそうあって欲しい」とパウロは願っているのです。

もちろん、私たちに対しても同じことです。主があなたに望んでいることは、あなた自身が主を敬うゆえに、主を愛するゆえに、主の忌み嫌われることから離れて、主がお喜びなることを選んでそのように歩んで行くことです。それが主によって贖われたクリスチャンとしての生き方であるとパウロは言うのです。

今までのところを振り返ってください。パウロという人の姿が見えますか？パウロは常に神を礼拝し

ながら、神をいつも崇めながら、主のみこころに喜んで従った、しかも、熱心に従ったのです。どうしてパウロはそのように生きたのでしょうか？主を心から敬っていたから、主に喜んでいただきたいという願いを持っていたからです。確かに、その願いを持ちながら生きていくことを皆さんも実践されていると思います。でも、実際にそのような生き方を継続することは確かに難しいです。なぜなら、神に対するそのような思いを持っていても、その思いはすぐに挫かれてしまうからです。私たちの周りにはいろいろなことがあり、いろいろなことが日々起きているからです。そこでパウロは私たちにもう一つのことを教えてくれるのです。

2) その力

彼は正しい動機だけでなく、正しい力によって生きていました。5：14を見てください。「というのは、キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです。」とあります。13節でパウロは自分の熱心を語りました。そして、14節の最初にその説明を加える接続詞をギリシャ語で付けています。なぜ、熱心だったのか？なぜ、熱心に歩み続けているのか？その説明がこの14節に出て来るのです。「キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです。」と、これが答えです。「取り囲む」とは「追い立てている、駆り立てる、促す」という意味です。つまり、キリストの愛が自分自身の信仰者としての歩みの原動力だったのです。ここでパウロが言っている「愛」は、キリストに対する愛ではないのです。キリスト自身の愛です。私たちイエス・キリストを信じる者たちは、そのキリストの愛が私たちのうちに備えられています。そして、そのキリストの愛が私たちをこのように駆り立てて行くというのです。しかも、この「取り囲んでいる」という動詞は現在形が使われています。このようにキリストの愛によって駆り立てられ続けて行く、キリストの愛によってあなたは押し出され続けて行くと、そのことをパウロはここで言っているのです。

ですから、彼自身の意志にそのような力があつたのではないのです。彼が非常に強固な意志を持っていて、このように歩み続けたというのではないのです。キリストの愛がそのように歩ませてくれたのです。そのようにパウロ自身が告白しています。14節の続きは「私たちはこう考えました。」です。「このようにみなします、判断します、このように決心する、決定した」というのです。しかも、この結論は今到達したのではなく過去に到達していると言うのです。それがいつ起こったのでしょうか？パウロ自身がイエス・キリストを信じたときです。彼がイエス・キリストを信じたときに彼は何を考えたのか？それは「イエス・キリストの十字架とイエス・キリストの復活」です。そのことを考えた時に、彼はこのように生きていこうというこの結論へと導かれたとこのように言っているのです。

◎なぜ、キリストは十字架で死なれたのか？

この5章の14節から15節を見ると、イエス・キリストの十字架と復活のことに触れられています。14節後半に「ひとりの人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのです。」、15節にも「また、キリストがすべての人のために死なれたのは、」とあります。

(1) キリストの十字架は私の身代わりだった

ですから、パウロは十字架を見た時に「あの十字架のイエスの死は私の身代わりであった」と、そのことをはっきりと確信しているのです。創造主に対して罪を犯している私がさばかれるのではなく、創造主ご自身が私のさばきを代わりに受けてくださった。そして、15節の続きを見てください。「生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。」と、キリストが死なれたのは「よみがえった方のために生きるため」だと言います。イエスがあなたの身代わりとなって死んでくださった。そして、その死後三日目の復活によって、すばらしい完璧な救いを神ご自身が備えてくださったのです。なぜ、そのようなことをされたのですか？それはあなたが天国に行ける者となるためです。

(2) キリストのために生きるため

でも、それだけではありません。今、私たちが見たようにみことばは私たちに言うのです。「イエス・キリストがあなたの身代わりとなって十字架で死に、あなたのためにその死からよみがえって来られたのは、生きているあなたが、この地上にいるあなたが今までの自分のために生きる人生を過ごすのではなく、自分のために死んでよみがえってくださったこの主イエス・キリストのために生きるため。そのために主は十字架で死にその死からよみがえって来られた。」と。パウロはそれを知った時に、私のこれまでの人生は間違っていた、自分中心に生きる人生は間違っていた、私はこの主のために生きるのだ、それこそ永遠に価値ある生き方であり、それこそ創造主なる神が望んでおられる生き方であり、神のみこころであると言うのです。ですから、パウロはそのように生きる決心をしたのです。イエス・キリストを信じたときに、もう私のために生きる人生はこれで終わり、これから私はこの神のために

生きていく、この神のみこころに従って生きていくと、そのような人生を歩み始めたのです。

15節に「よみがえった方のために生きるためなのです。」とありますが、「生きるためです」はただ現在形であるだけではないのです。人々に対する激励を与える使い方をしています。というのは、パウロは「私はそのように生きています。でも、私だけでない、信仰者であるあなたも同じように生きなさい！」と激励し励ますのです。なぜなら、どのように生きて行くかという責任はあなたにあるからです。私たちの選択だからです。あなたの選択です。聖書は私たちに、神は私たちがどのように生きることを望んでいるかを教えてくれます。その選択をするかどうかはあなたの責任なのです。パウロは「私はこのように生きていく。みこころに従って生きていく。そして、あなたにもそのように生きてもらいたい。」とこのようにここで言っているのです。

信仰者の皆さん、しっかり覚えてください。ここでパウロは言ったのです、神があなたに望んでおられること、それは、あなたのために救いを備えてくださったこの主のためにあなたは毎日生きることだと。こういうことです。あなたの為すことすべてを神のためにすることです。神が見たくない、聞きたくないという、そのようなことから離れることです。神がお喜びなることを選択し、それを継続して行ない続けることです。あなたに与えられている責任があるなら、それを喜んで主のために為すことです。学生なら与えられている勉強を主のために一生懸命やることです。それは人から褒められるためではありません。神が喜んでくださるからです。なぜ、主婦は一生懸命家事に励むのでしょうか？それが主によって与えられている大切な務めだからです。主のために喜んですることです。なぜ、仕事をするのですか？主がその責任を与えてくださったからです。一生懸命主のためにすることです。仕事も定年を迎えた。それなら、その与えられている時間をどのように主のために生きるのか、どのようなことをして主に仕えて行くのか考えて主のために生きて行くことです。人々に会う前に、あなたのことばや態度が主の栄光を現わすように、そのことを祈りながら助けを求めながら生きていくことです。

私たちは神の恵みによって救われました。そして、救われた私たちは救ってくださったその神のすばらしさを世に証するため生きるのです。パウロはそのようにして生きて来たのです。そして、あなたもそのように生きるようにと勧めを与えてくれるのです。ローマ書6：4に「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。」とあります。これが「新しい人生の目的」です。主があなたを救いへと導いてくださったのは、あなたが新しい歩みをするためなのです。信仰者の皆さんが思い出さなければいけないことは、かつての神に逆らって来た、神の前に全く価値のない生き方は死んだということです。あなたは生まれ変わったのです。新しい人生の目標を持って、あなたを造ってくださり、あなたを愛してくださり、あなたを救ってくださり、あなたを生かしてくださっているこの神に従う人生が始まったのです。問題はそのような人生を歩んでおられるかどうかです。

クリスチャンをひと言で言えばどうなるのか？「キリストを個人的に知り、その生き方が変えられた者たち」です。なぜなら、キリストを個人的に知れば、その生き方は結果的に変わって行くからです。神が変えてくださる。ですから、「キリストのことを知っている人たち」ではないのです。「キリストを個人的に知り、そして、その生き方がこの主によって変えられた人たち」、これがクリスチャンです。そのようにパウロは私たちに教えてくれるのです。少なくとも、皆さんはそのように人々に説明することができます。ことばでもって、そして、どうぞ、生き方をもってそれを証明してください。私たちは新しく生まれ変わった者、新しい歩みを歩む新しい人になったのです。

この新しい年を迎えるに当たって、そのことを覚えながら新しい人として生きてください。新しい歩みを始めた者として、ますますそのように歩み続けてください。それはすべて「私たちの主が人々の前で証されて行くために」です。